

R. E. Elson,

*Suharto : A Political Biography.*

Cambridge: Cambridge University Press,  
2001, xxi+389pp.

まつ い かず ひさ  
松 井 和 久

I

人物や物事の評価は、歴史の流れのなかで絶えず変化する。なかでも、権力者に対する評価はその時々の政治的思惑に左右され、しかも黒白や善悪で単純に評価されやすい。インドネシアで32年間の長期政権を経て、1998年5月に大統領の座を追われたスハルトもまた、そうした歴史的评价の俎上に上げられつつある元権力者の一人と言える。

かつてスハルトの権力が絶頂の時代、人々は彼を公然と批判することを避けた。政治家も官僚も実業家も商店主も農民もベチャ（輪タク）曳きも、こぞってスハルトを讃えた。新聞やテレビはスハルトの御用メディアと化した。テレビ・ニュースのトップにスハルトが現れなければ、「スハルトに何かあったのでは」と解釈されるのが普通だった。

ところが、彼が大統領を辞めた途端に事態は一変する。汚職・腐敗・ネポティズム、貧富格差の拡大、経済の非効率など、インドネシアのあらゆる諸悪の根源として、スハルトは糾弾されたのである。彼を糾弾した者の大半は、彼が権力の座を去る数日前までスハルトを礼賛していた人々であった。長期政権を誇った権力者は孤独な悪人となった。

本書は、こうした状況下で、できる限り客観的な評価を目指して書かれたスハルトの伝記である。スハルト時代を全否定するような風潮がインドネシア内外に溢れている現状からすれば、本書のよう

な書物の出版それ自体に意義があると言えるかもしれない。また、これから何年もしてスハルトの歴史的评价が固まっていくのを待つことなく、現状で活用できる情報や見聞を駆使して一冊の伝記を書き上げようとした、著者の意欲は評価に値しよう。

伝記という性格上、本書はスハルトの幼少期から現在に至るまでを歴史的にトレースする、以下のようなオーソドックスな構成を取っている。

- 第1章 はじまりと少年時代
- 第2章 革命期の兵士
- 第3章 中ジャワ司令官、1950-1959
- 第4章 高い地位、1959-1965
- 第5章 クーデターの企て
- 第6章 権力の座へ、1965-1968
- 第7章 正統性と基盤固め、1968-1973
- 第8章 新秩序に係る諸問題の交渉、1973-1983
- 第9章 権勢の頂点
- 第10章 後退、転落、清算
- 第11章 男とその残したもの

II

本書の書きぶりは、特に前半は、自伝を含めたこれまでのスハルトに関する書物の描写を一人の人物が歳を重ねていく連続性のなかで相互に比較検討していく、というスタイルである。このため、すでにスハルト時代に「公式見解」あるいは通説と見なされてきた解釈にも率直な疑問が投げかけられている。その場合でも複数の仮説を提示して各々の妥当性を検討し、安易に結論を導かぬよう留意している。

第1章は、スハルトの青年期までの記述だが、まずここでは、出生時の様子が書物によって微妙に異なる点が指摘されている。例えばスハルトを取り上げた助産婦や父親の離婚の時期に関する記述が出典により異なることが示される。また、「日本占領期終了時の食糧難の際に部下たちの食糧をどう確保するかが最初の試練であった」と述べられ、以後のスハルト統治におけるパトロン＝クライアント関係の原型をうかがわせる。

第2章では、オランダとの独立戦争時の様子が描

かれるが、著者は、「スハルトは独立戦争に際して目立った働きをしたわけではない」と論じる。特に1949年3月1日のジョグジャカルタ攻略での彼の役割は限定的であり、同事件を独立戦争勝利への転換点とする通説は「スハルト絶頂時代の粉飾」としている。しかし同時に、野戦指導者としての経験と政治的思惑に左右されない手堅さがその後の彼の成長を支えたことも指摘する。

第3章の内容は、1950年代の中ジャワでのディポネゴロ師団時代である。政治には関心を示さず、国家の統一を維持するため地方反乱には断固たる態度で望む彼の愚直な姿が描かれており、彼がディポネゴロ師団の司令官を務めたこの時期が「最も幸福で充実していた」と評する。部下の福利厚生を目的に始めた陸軍内での協同組合活動や、軍人向け以外に中ジャワの貧困対策のための物資売買にも乗り出さなかで、スハルトは、後に大統領補佐官となるアリ・ムルトボ、スジョノ・フマルダニらと知り合う。スハルトは実業家リム・スイウリオン（林紹良）ともこの時期に特別な関係を築いたと一般に言われるが、著者は、「両者が元々旧知だったという証拠はなく、スジョノを通じて懇意になった」と推測している。

第4章は、軍内部で存在感を高めていく1960年代前半のスハルトを描く。愚直で目立たない存在だった彼を、時のスカルノ大統領は1961年、西イリアン解放作戦を指揮するマンガラ師団司令官に抜擢する。この職務を忠実にこなしスハルトは1963年3月に陸軍戦略予備軍（Kostrad）司令官に任命されたが、左傾化する政府からの圧力やマレーシアとの対決政策に積極的に呼応せず、むしろマレーシア側を親インドネシアにするための諜報工作を裏で行ったことなどが描かれる。そして、スカルノ大統領に反発するナスティオン国防治安相とスカルノの意向により近いヤニ陸軍相との間に自分の立場を置き、ナスティオン寄りながらも両者と微妙な距離を保ちながら、「スカルノには常に忠誠心を示して敵視されることを避け、軍内で最も力を持つ存在となっていく」と論じている。

第5章では、1965年の10月1日事件でのスハルト

の役割を論じている。この事件の評価については、1998年のスハルト退陣後に、ラティフ元大佐の証言など、スハルト時代の政府公式見解とは異なるさまざまな説が現れており、歴史的評価の見直し作業が始まっている。著者は、インドネシア共産党によるクーデター未遂事件という公式見解、軍内の不満分子が主導して共産党が偶然に関係したという説（いわゆる「コーネル・ペーパー」と同様の見解）、および共産党が軍に不満を持つ若手軍人の協力でクーデター計画を企てたとする説、の3説を事件の経過に併せて相互に検討している。そして、事件の全容を現時点で説明するのは無理だとしながらも、3番目の説に近い立場を取っている。

第6章は、スハルトがスカルノに代わって大統領に就任するまでの1960年代後半の記述である。1965年10月1日事件を契機として、同事件への関与を疑われたスカルノの影響力は徐々に後退する。著者は、「スカルノに対するスハルトの姿勢は終始曖昧だったが、共産党に対する彼の態度は明白だった」と強調し、少なくとも敵である共産党を壊滅させる好機という認識は持っていたと推察している。スカルノ大統領から全権を移譲された1966年3月11日命令書の発出を含め、スハルトの大統領就任への過程は「注意深く合法的な形で進められた」が、「ここでの我慢強く不屈で計算高い態度こそが彼を権力の頂点まで上らせた」と著者は論じている。

第7章は、スハルトが大統領としての正統性を確立していく1968年から73年までの描写である。彼は治安維持と経済開発を重視した保守的な内閣を組閣し、独立時に定めた1945年憲法に基づく政治システムの確立を目指した。経済復興のために米国帰りの経済学者を多数登用したことはよく知られるが、そうした表向きの経済政策の一方で、国営石油公社（プルタミナ）などからの予算外資金を軍のビジネスや政治工作に使う裏の経済政策をも取ることで「海外投資を呼び込むと同時に政治的安定を確保できた」と論じている。共産主義の脅威の喧伝、軍治安秩序回復司令部（Kopkamtib）の設立、軍の二重機能論に基づいた地方首長への軍出身者の登用などを行うとともに、共産党シンパの排除など軍の規

律向上、職能団体ゴルカルの設立および1971年総選挙の実施と既存政党の再編など、スハルトの「新秩序」体制は着々と築かれたが、「その構造と実施に矛盾を包含していた」ため、早速学生や政治家からの批判にさらされた。彼とそのグループは「こうした批判を真っ向から封じることなく、それを無視して国民から遊離していった」と著者は見る。

第8章は、スハルトの「新秩序」がさまざまな問題を噴出させた1973年から83年の苦い経験の時期を描いている。反華人・反日暴動とされる1974年のマラリ事件、その後の東ティモール併合、プラタミナ危機、サウイト事件、スハルト退陣を求める学生運動、軍人や50人請願グループによるスハルト批判など、この時期は政権への批判や政治的危機が絶え間なく続き、ナスティオン将軍が「5年経つごとにスハルトのグループは益々狭くなる」と評する状況であった。しかし、スハルトはこの時期、石油ブームの恩恵を受けて、インフラ建設、人的資本投資、官僚機構の拡大、農業生産の増大など、経済社会開発に目覚ましい成果を挙げ、1978年および83年に大統領再選を果たした。著者は、「この経済社会開発が軍の力を必要としない新種のインドネシアを作り出す基礎となり、この時期に権力基盤が軍から官僚機構へ移り始めた」と論じる。

第9章は、世界最大の米輸入国だったインドネシアが食糧自給を達成して国際食糧農業機関（FAO）から表彰され、建国五原則（パンチャシラ）と1945年憲法を全政治社会組織の存立唯一原則として法制化することで盤石の体制を築き上げた80年代半ばから90年代前半が描かれている。1980年代半ばの石油価格暴落はインドネシアにかつてない大胆な経済自由化、規制緩和政策を断行させたが、著者は、「それでもスハルトの経済政策のスタンスは強固な経済民族主義感情と西側の経済覇権への警戒が基本にあった」とし、この頃から顕著な彼の子供たちによるファミリー・ビジネスをその根拠に挙げる。1987年総選挙でスハルトを支えるゴルカルは史上最高の得票率で圧勝した一方、85年の大幅な機構改革などにより、彼の権力基盤だった軍の地位は低下し続けた。経済社会開発に伴う社会の急速な変化により中間層

が台頭し、一部退役軍人が評したように、「彼がトップに座り続ける必要性が薄らいだかのような状況になっていった」と著者は論じている。

そうした権力の絶頂にあったスハルトが転落していく過程を描いたのが第10章である。ここでは諸説の比較検討ではなく、1990年代前半からの事実が淡々と描かれている。なかでも1996年、スハルトの妻ティンの死がスハルトにとっていかに重要な意味を持つ出来事であったかが章内の各所で浮かび上がってくる。すなわち、よき忠告役であった彼女の死によってスハルトは自制できなくなり、ファミリー・ビジネスを歯止めなく進行させ、汚職を蔓延させたと著者は見る。スハルトの転落は、彼の「新秩序」が社会の変化に対応できなくなっていたことが基本的な原因であり、「1997年以降の経済危機はそれを強化・拡張する触媒の役目を果たしたに過ぎない」というのが著者の見解である。

そして第11章は、それまでの章の総括ともいうべき位置付けである。複雑で単純、教育が低い、ジャワ的、周到で政治的に計算高い、控えめで家族思い、歴史的過去に学ぶ姿勢、他人への不信感、そして「インドネシア社会の観念は時代を超えて不変」とする保守的な歴史観。著者は、こうしたさまざまな特徴を持つスハルトという人間が、能力のある人材を自分に惹き寄せてパトロン＝クライアント構造のなかに取り込む一方、政治的なライバルや敵には慈悲を一切示さず、しかし勝ち目のない敵をつぶさずに注意深く少しずつ無力化させていく、政治的戦略的な能力を発揮してきたと評している。

スハルトは何を達成したのか。これについては、彼が目覚ましい経済成長を達成し、「新秩序」における支配的な立場を確立した一方で、政治的自由を抑圧し、国民のアイデンティティの芽を踏みつぶしたことを指摘する。そして、「スハルトの進めた経済社会的な近代化が社会の大きな変化を生み出し、それを封じようとした彼は皮肉にも大統領の座から引きずり下ろされてしまった」と論じている。そして最後に、スハルト以後、彼のような政治的戦略的な能力を持ってインドネシアを導くリーダーが不在であることを指摘し、安易なスハルト批判と一線を画

している。

### III

本書は伝記という体裁を採ってはいるが、全体を通じて、著者のスハルトに対する独自のアプローチやいくつかのキーワードを基にした一貫した見方が示されていない。また、スハルトとの特別な個人的関係に基づいた新事実が散りばめられているわけでもない。おそらく、著者はスハルトとの親しい接触はないと思われる。むしろ、スハルトの生の姿や肉声を表出させるよりも、スハルトの自伝を含む既存のさまざまなスハルトに関する文献や資料の記述を細かく検討し、その検討作業のなかから浮かび上がってくる描写を整理して、スハルトという人物を総体的に論じようとした著作、と捉えるべきであろう。

最後に、本書のなかで気になった点を指摘する。それは、スハルト時代の統治概念として重要とされる家族主義 (kekeluargaan) についてあまり触れていないことである。

「ブン・カルノ」(スカルノ同志) と呼ばれたスカルノとは対照的に、「バツ・ハルト」(スハルトさん) と呼ばれたスハルトは、大統領として国家という大家族の父親 (ババツ) を演じた。親は子供である国民を諭し導く存在であった。省庁では大臣が、地方政府では地方首長が、企業では社長が、学校では校長が、協同組合では協同組合長が父親を演じたのである。父親は家族を養うために資金を調達し、家族へ配分する役割を持つ。この家族主義がインドネシアのほぼすべての組織・機関で貫徹された。この家族主義こそが子供の自立を妨げ、組織的に国民のアイデンティティ発露の芽をつぶしたのである。

著者は「スハルトは他人を信用しなかった」という。国民 (子供) を養う父親であっても、スハルトは子供を信用することはなかったのだろう。だが一方で、「養われた子供は恩義を感じて親に忠誠を誓うから、親を裏切ることは絶対にない」と思っていたに違いない。そして、スハルト家の子供たちの成長とともに、妻の死も重なって、家族主義の「家族」は国家からスハルト・ファミリーへと矮小化さ

れていった。しかしその一方で、子供である国民もまた、実はスハルトを信用していなかったのである。相互信頼なきパトロン＝クライアント関係の最後は無残なものである。1998年5月、内閣を組閣できないスハルトは側近らに次々と造反されて、孤独のまま大統領の座を下りざるを得なかった。

政治社会的混乱が続く現在、インドネシアでは「スハルトの時代はよかった」と懐かしむ人々が少なくない。「スハルトの子供」を何も考えずに演じていれば、物事はすべて治まったからである。スハルトの退場とともに家族主義が解体し、スハルトと信頼関係を築かなかった国民が政治的社会的混乱のなかに放り出された。彼らには救世主の出現を願う意識も根強いが、彼らの間での複雑で面倒な信頼関係の作り直し作業を避けて通れない現実がある。スハルトなき国民は、子供状態からの自立を余儀なくされているのであり、経済的社会的変化や民主化はそれを促す。彼らが自立して相互に信頼関係を築けたとき、スハルトのような指導者が登場する余地はもはやなくなるのだろう。

いずれにせよ、スハルトに関しては、その人物像と関係付けてインドネシアの政治・経済・社会の動勢などを論じた著作 [McDonald 1980; Jenkins 1984 など] は多いが、スハルト自体に焦点を当てた伝記は意外に少ない。伝記と言えそうなのはスハルト政権初期のルデールの著作 [Roeder 1969; 1976]、および権力者としての絶頂期に長女トゥトゥツ (Tutut) の会社から出版された自伝 [Dwipayana and Ramadhan 1989] の2冊がある程度であり、後者は現在でもスハルト側の公式見解と見なされている。その意味でも、本書は、スハルトという人物に対する今後の客観的評価の出発点、すなわち、黑白や善悪を超えたさまざまなスハルト論がこれから現れてくる契機を提供したと言えよう。

### 文献リスト

- Dwipayana, G. and Ramadhan K. H. 1989. *Soeharto: Pikiran, Ucapan dan Tindakan Saya: Otobiografi* [スハルト：私の思想、言説、施策：

- 自伝]. Jakarta: PT. Citra Lamtoro Gung Persada.
- Jenkins, David 1984. *Suharto and His Generals: Indonesian Military Politics 1975-1983*. Ithaca, New York: Cornell Modern Indonesia Project, Cornell University.
- McDonald, Hamish 1980. *Suharto's Indonesia*. Sydney: Fontana Books.
- Roeder, O.G. 1969. *The Smiling General, President Soeharto of Indonesia*. Jakarta: Gunung Agung.
- 1976. *Anak Desa: Biografi Presiden Soeharto* [村の子：スハルト大統領の伝記]. Jakarta: Gunung Agung.
- (アジア経済研究所地域研究第1部副主任研究員)